



令和2年度

富士市農林水産業功労者表彰受賞

安藤 公男 さん



生姜の収穫



表彰式



枝豆と生姜

高校時代に進路を決めるタイミングで農業への関心が膨らんだ

富士市富士岡の安藤公男さん(70)は、専業で複合栽培を手掛ける農家の4代目。妻と二人三脚で、約1ヘクタールの畑と水稲7ヘクタールを管理している。

「そろそろほうれん草やキャベツ、カリフラワーなどの秋冬野菜の準備を始めるよ。二人でぼちぼちやるか」と目を細めながら、優しく語る公男さん。

夏期には露地で枝豆や葉ネギを、温室で葉生姜などを栽培し、広大な水田も管理する。長年にわたり農業の発展に寄与され、8月に富士市から令和2年度富士市農林水産業功労者表彰を受けた。

「高校時代に進路を決めるタイミングで農業への関心が膨らんだ」

当時、家の敷地内に茶の製造工場を完備。新茶の季節には自宅の畳を上げて茶葉を広げ乾燥させていた。「幼い頃から農業は生活の一部」という何気なく話した友人の言葉が心を動かした。

東京農大農学部農学科で蔬菜園芸

学を研究し、自ら農業の道を選んだのは今から48年前。農地の管理は勉強だけでは難しく、経験を積み重ねながら、美味しい野菜作りの模索を今でも続けている。

富士ほうれん草出荷組合の一員でもあり、定期的に静岡市の市場まで2トントラックを走らせる。土づくりにこだわり、軽トラック5、6杯の馬フン堆肥を年2回10アールの畑に投入。堆肥は土を分解、適度な隙間を生み、作物の根が栄養を吸収しやすい環境を整える。

「水田に、ジャンボタニシがいっぱいいるんだよ。吉永地区では、毎年仲間と協力して、駆除作業を行っている」

植えたばかりの稲を片端から食害するジャンボタニシ。被害を少なくするには丁寧な代掻きも大事らしい。田畑の集約化や耕作放棄地の防止にも携わり、多忙な日々を送るが、公男さんの笑顔を見ていると、仕事は大変でも農業への熱意は伝わってくる。

TAKUMI